叙事詩の宗教哲学
—-Mokṣadharma-parvan 和訳研究（XVII）[1]—-

茂木秀淳

[224 章 vv.61-74](D.232 章 vv.31-43, 8541-8554, K.238 章 vv.100-112)

(61)　クシャトリヤは行為を祭式とし、また[2]ヴァイシャは供物を祭式とし[3]、シュードラは奉仕を祭式とするのに対し、再生族は苦行を祭式とする。(Cf.MBh.XII.230.12)

(62)　これらの祭式の規定 (vidhi) は、トゥレーター・ユガにはあるが、クリタ・ユガにはない[4]。もろもろの祭式は、ドゥヴァーパラ・ユガにおいて、そしてカリ・ユガにおいても衰退する。(Cf.MBh.XII.230.15ab)

(63)　(クリタ・ユガにおいては) 人々は、異なるダルマをもたない[5]。リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴェーダも (異なるダルマをもたない) 。欲望の繁栄を (自分たちがなすべきものとは) 別のものと見て[6]、もろもろの苦行によって苦行のみが (実践される[7])。(Cf.MBh.XII.230.8)

(64)　トゥレーター・ユガにおいては、しかし、それらすべては[8]大きな力をもって現れ[9]、動かぬものと動くものをあらゆる面で支配する[10]。(Cf.MBh.XII.230.14)

---

[1]本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XVI)–』(信州大学教育学部研究紀要第 100 号 2000 年 8 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いるものは以下のようである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, *Yoga-technique in the Great Epic*, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901.
- Hopkins[1901-2]: E.W. Hopkins, *Notes on the Çvetāçvatara, the Buddhacarita, etc.*, JAOS vol.22, pp.380-389, 1901.
- Sörensen[Index]: S. Sörensen, An Index to the Names in the Mahābhārata, with Short Explanations and a Concordance to the Bombay and Calcutta Edition and P.C.Roy's Translation, London, 1904. (Reprinted: Delhi 1963, 1978)
- Vedic Index: A.A.Macdonell and A.B.Keith, Vedic Index of Names and Subjects, 2vols., London, 1912.
- Haas[1922]: George C.O.Haas, Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā, JAOS, vol.42 pp.1-43, 1922.
- Johnston[1937]: E.H. Johnston, Early Sāmkhya, London, 1937.
- Edgerton[1965]: F. Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, Liverpool, London, Prescot, 1965.
- Olivelle[1993]: P. Olivelle, The Āśrama System, Oxford, 1993.
- Hara[1997]: Minoru Hara, *'A Note on the Gṛhasthāśrama'*, Lex et Litterae; Studies in Honour of Professor Oscar Botto, Torino, pp.221-235, 1997.

[2]P. tathā　D.,K.: smṛtāḥ

[3]haviryajñā　Cp. havir iti pākayajñopalakṣaṇam /　Cs. haviryajñāḥ kṛṣigorakṣādinā havir upādakāḥ /

[4]na kṛtayuge　Ca. tretāyuge kāmapravaṇe manasi vidhir adhikārilābhāt / na tu kṛte niskāmatvāt /　Cn. vidhir apravṛttapravartanam / tac ca tretāyām eva na tu kṛte / svata eva tatra tatsiddheḥ /　Cs.(reading avidhis) anuṣṭhānavilayam, yathāvad anuṣṭhānābhāvaḥ /

[5]apṛthagdharmiṇo　Cn. apṛthagdharmiṇo 'dvaitaniṣṭhāḥ /

[6]pṛthagdṛṣṭvā　Cn. pṛthagdṛṣṭvā tatphalam anātmabhūtasvargādirūpaṃ dṛṣṭvā /

[7]tapobhis tapa eva ca　N. martyās tapa eva yogam eva kṛtayuge 'nutiṣṭhantīti śeṣaḥ

[8]P. samastās te　D.,K.: samastā ye　Ca. samastāḥ sarve te yajñādayaḥ /

[9]mahābalāḥ　Ca. mahābalatvaṃ yajñādīnāṃ mūlasya kāmasya dārḍhyāt / ata eva sthāvarajaṅgamānāṃ saṃyantāraḥ /

[10]saṃyantāro　Cn. saṃyantāro dharmaśāstāraḥ /

(65) これら (ヴェーダ) は、祭式・ヴァルナと同様に[11]、トゥレーター・ユガでは力弱まり (saṃhatā)、そして (tu)、寿命の短縮の故に[12]、ドゥヴァーパラ・ユガにおいて衰微する。(Cf.MBh.XII.230.14)

(66) カリ・ユガにおいては、すべてヴェーダは、(部分的に) 見られることもあるが、(全く) 見られないこともある。そして唯一のダルマの堤防であった[13]ヴェーダは、祭式と共に消滅する。(Cf.MBh.XII.230.15c-16b)

(67) しかし、クリタ・ユガにおけるダルマは、(カリ・ユガにおいては、) 活力あり、熱力あり、知識あるバラモンの間で確立されているのが見られる。

(68) それぞれのユガにおいて、自己のダルマに基づくヴェーダの言葉は、ダルマと誓約とに結びつくことなく (?)[14]、ダルマに従いユガに従って変化する[15]。(Cf.MBh.XII.230.17, Hopkins[Great Epic] p.3, fn.2)

(69) あらゆる動くそして動かぬ[16]生き物は雨季に雨によってたくさん創造されるのと同様に、ダルマもユガごとに (数多く創造される)。(Cf.MBh.XII.230.18)

(70) 季節には、様々な姿の季節の特徴が、それぞれ (季節が) 進むうちに、見られる。ブラフマンの昼と夜に[17]おいても同様 (にさまざまなダルマが見られる)。(季節の比喩は Manu 1.30 にも見られる。)

(71) 時の多様さ、そして無始無終は定まっている。かつて汝に告げられたもの、それ (時) が[18]もろもろの生き物を生み、そして食べる。(Cf.MBh.XII.230.19)

(72) 統御と自制が (?)[19]、誕生に際して生き物の位置を規定する[20]。(生き物は、自性と) 反対のものと結びついても、自性によって[21]、様々に存在する。(Cf.MBh.XII.230.20)

(73) 創造・時・行為・ヴェーダ・行為者・為すべきこと・行為・結果[22]、(これら) 汝が私に尋ねたことはすべて、息子よ、汝に語った[23]。(Cf.MBh.XII.230.21)

(74) 今や、(ブラフマンの) 昼が去り、夜が始まった時の、(世界の) 帰滅について語るとしよう。そして、いかにして一切の支配者が (viśvam īśvaraḥ)、この極めて微細な大我を創造したのかを (語るとしよう)。

(75) 天において七つの太陽が[24]、火の光線によって燃えると、その時にこの一切の世界はすべてその光線によって燃え尽きる (jājvalyate)。

[225 章] (D.233 章 vv3-19、8557-8574, K.239 章 vv.3-19)

ヴィヤーサは言った。

---

[11]P. hy ete yajñā varṇās tathaiva ca D.,K.: vedā yajñā varṇāśramās tathā

[12]saṃrodhād āyuṣas Cs. saṃrodhāt hrāsāt /

[13]P. kevalā dharmasetavaḥ D. kevalā 'dharmapīḍitāḥ D. kevalā dharmapīḍitāḥ Cp. (reading kevalādharmapīḍitāḥ) kevalena saṃpūrṇenādharmeṇa pīḍitāḥ /

[14]P. adharmavratasaṃyogaṃ D. sadharmavratasaṃyogaṃ K. sa dharmaḥ praiti saṃyogaṃ Cp. sadharmavratasaṃyogaṃ yathā syāt tathā /

[15]P.,K.: vikriyante D. vikriyate Cs. viklidyante (for vikriyante), bahulā bhavanti N. vaidikā api svargakāmā eva yakṣyante dvāpare putrādikāmā eva kalau śatrumaraṇādikāmā eveti yuge yuge ity asyārthaḥ /

[16]janṅgamasthāni Cs. janṅgamasthāni matsyamaṇḍūkakhadyotādīni, tṛṇavīrudhauṣadhādīni /

[17]P. brahmāharātriṣu D.,K.: brahmaharādiṣu Cv. brahmāharādiṣu brahmaṇaḥ ahāni, dināni teṣām ādiṣu / ahorātriṣu が正しい語形。しかしそうすると d の韻律が- -++と不規則になる。

[18]tat c 句の yat に対応すると考えられるが、Duessen は、yat は ab 句と関連させて「そのことは汝に告げられた」と理解し、tat は Brahman としている。

[19]P.,K.: saṃyamo yamaḥ D. samayo matam

[20]P.: dadhāti prabhave sthānaṃ D. dadhāti bhavati sthānaṃ K. dadāti bhavanasthānaṃ Cs. etad dhi etat kālanānātvam / ... / kālaparyāyeṇa jāyante vardhante mriyante ca /

[21]svabhāvenaiva Cp. svabhāvo 'vidyā / tenaiva bhagavadvīkṣitena /

[22]P. sargaḥ kālaḥ kriyā vedāḥ kartā kāryaṃ kriyā phalam K. sargakālakriyā vedāḥ kartā kāryaṃ kriyāphalam D. ははっきりしないが、N. を見る限り大体 K. と同じようである。

[23]D.232 章と K.238 章はここで終わっている。次の 2 つの詩節は D.233.1-2, K.239.1-2 に対応する。

[24]P. sūryās D.,K.: sūryas D. と K. は複数は数詞で表している。

(1) 生き物は、動くものも動かぬものも、最初に地の中へ消滅して、地の性質に至る[25]。

(2) そして、あらゆる動くもの動かぬものすべてが消滅すると、その時地は、木もなく[26]草もなくなって、亀の背のように見える。

(3) さらに地の属性である香りを水が取る時、香りを取られた地は消滅すべきものとなる。

(4) その時、水は、波を伴い豪音を発して進む。この世の一切を満たした後、静まったり動いたりするのである。

(5) 水の属性もまた、友よ、火が奪う。その時、属性を取られた[27]水は、火の中に消滅する。

(6) 中空にある太陽を炎ある火が覆うとき、この世のすべての天空は火で満たされ、燃え上がる。

(7) 火の属性である色も風が奪う。その時、火は静まり、大きな風が激しく吹く。

(8) その時、風は自らの生じた (? saṃbhavam) 根源に[28]達した後、下方、上方、斜めにと十方に吹く。

(9) 風の属性である接触も、虚空が飲み込む。その時、風は静まり、虚空が, 音を発さずに[29]存在する[30]

(10) 虚空の属性である音声を、顕現を本性とする[31]マナス (manas 思考器官) が (飲み込む)。マナスの顕現したものを未顕現が (飲み込む)[32]。それがブラフマンへの帰滅である[33]。

(11) それ (心) が、(月?) 自らの属性に入った後、月がマナスを飲み込む[34]。マナスが静まると、大我は月の中に留まる[35]。

(12) それを[36]長い間願望が支配する。願望は心を[37]飲み込む。そしてそれをこの上なき知識が (飲み込む)。

(13) 時は知識を飲み込む、時は力を[38](飲み込む)、と天啓聖典に伝えられている (cf.Chāndogya U. 7.8.1)。時は力を飲み込むが[39]、その時を、賢者は支配する。

---

[25]bhūmitvam upayānti　Ca. bhūmitvam upayānti, pralayānaladagdhāni bhumyekaśesāṇi bhūmau līnāni bhavanti /

[26]P.,K.: akāṣṭhā　D. nirvṛkṣā

[27]P. tadā āttaguṇā　D.,K.: tadā tv āttaguṇā　P. の sandhi は不規則。韻律上の配慮か。D.,K. は hiatus breaker として tu を挿入し、sandhi を規則的にしている。

[28]P.,K.: mūlam　D. svanam

[29]P.,K.: nānadat　D. nādavat

[30]D.,K. はこの後に次の詩節を挿入している。

arūpam arasam asparśam agandhaṃ na ca mūrmimat /
sarvalokapraṇaditaṃ khaṃ tu tiṣṭhati nādavat (K. nānadat) //

[31]abhivyaktātmakaṃ　Cn. abhivyaktātmakaṃ śabdādisthūlasarvadṛśyarūpam /　Cs abhivyaktatmakaṃ, abhivyaktaṃ mahattvam ātmasvarūpaṃ yasya tat manaḥ, ahaṃkāraśabdaṃ, grasatīty anuṣaṅgaḥ /　K. は ab 句と cd 句の間に次の詩節を挿入している。

grasate ca yadā so 'pi zāmyati pratisaṃcaraḥ /

[32]manaso vyaktam avyaktaṃ　Ca. manaso yad vyaktam api rūpaṃ tad avyaktaṃ indriyāgrāhyam /

[33]P. brāhmaḥ sa pratisaṃcaraḥ　D.,K.: brāhmaḥ saṃpratisaṃcaraḥ　Ca. sa eva bhūtānāṃ tadguṇānāṃ ca manasi layarūpaḥ pratisaṃcaraḥ pralayaḥ, brāhmaḥ brahmanaimittkaḥ brahmaśayanasamayabhāvitvāt /　Cp. brāhmo brahmadināṇte bhavaḥ /　Cs. brāhmaḥ hairaṇyagarbhaḥ /

[34]mano grasati candramāḥ　Cs. mano mahattattvam — mano mahān matir brahma pūr buddhiḥ khyātir īśvara iti smṛteḥ — candramā mūlaprakṛtiḥ, ātmaguṇaṃ svasminn ākārabhūtaṃ mahattattvaṃ āviśya grasati /

[35]P. manasy uparate 'dhyātmā candramasy avatiṣṭhate　D.,K.: manasy uparate cāpi(K. cātmā) candramasy upatiṣṭhate　Ca. manasi mahattattve uparate mūlaprakṛtigraste sati, ātmā hiraṇyagarbhaḥ ksetrajñaḥ candramasi mūlaprakṛtāv avatiṣṭhate /　P. の adhyātmā という語形は可能か。

[36]taṃ tu　Cs. taṃ candramasam / prakṛtisaṃhāraḥ paramātmajñānād eveti dhvanayati mahatā kāleneti /

[37]cittaṃ　Cs. cittaṃ pradyumnaḥ /

[38]P. kālo balam　D.,K.: kālaṃ balam　Cs. balaṃ saṃkarṣaṇaḥ /

[39]balaṃ kālo grasati　Ca. bale ca dharmādharmayor janakatvaṃ kāla eva grasati /

(14) その時、虚空の音声を賢者は自己の内に置く。それは、未顕現なる最高のブラフマンであり、永遠にして至高のものである。このようにあらゆる生き物をブラフマンこそが帰滅 (させる)[40]。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.183, fn.1)

(15) 知識よりなる[41]認識の対象が (bodhyaṃ)、すぐれた自己をもつヨーガ行者によって認識された後、このようにありのままに正しく疑問なく語られた。

(16) このように創造と帰滅は (vistārasaṃkṣepau) ブラフマンと (その) 未顕現であるが[42]、それぞれ千ユガの始まりにおいて、繰り返し起こる。すなわち (ブラフマンの) 昼と夜の (始まりにおいて繰り返し起こる?)。

[226 章] (D.234 章、8575-8612, K.240 章)

ヴィヤーサは言った。

(1) 生き物の群れについての規定を[43]、このように私は語った。しかしバラモンの為すべきことについて、それを尋ねる[44]汝にこれから語るであろう。

(2) この者 (バラモン) にとって、誕生祭など、(師の家から) 戻るまでの、贈物を伴うもろもろの儀礼は、ヴェーダを究めたる師のところで行わるべし。

(3) ヴェーダすべてを学び、師への従順に喜び、師に対し借りなき者 (anṛṇas) となってから、祭儀を知る者として (師の家から) 帰るべし。(Cf.Olivelle[1993] p.154)

(4) 師によって (帰宅を) 承認されたならば、四つのうちの一つの生活様式 (āśrama) を、身体の解放まで、規定に従って生きるべし。(Cf.Olivelle[1993] p.154)

(5) (すなわち、) 妻と共に子孫の創造、あるいはまた、森の中か師のところにおける梵行、あるいは、苦行者のダルマ (という生活様式の選択) によって。(Cf.Olivelle[1993] p.154)

(6) しかし、四つの生活様式すべての中で[45]、家長期が根本であると言われている。なぜならば、そこで執着を滅し制御した者は、あらゆる点で完成するからである[46]。

(7) 子孫を持ち、ヴェーダに通じ、祭式を行い、(このように) 神聖な三つの借りから[47]解放されて、それから祭式によって清めらて、他の生活期に入るべきである。(Cf.MBh.XII.231.2; Olivelle[1993] p.154; Hara[1997] p.230, fn.24)

(8) 地上でもっとも清らかな学問の境地に住すべし。そこにおいて権威たることを求め、そして、最高の栄誉に到ることを求めるべし。

(9) 偉大な苦行によって、あるいは諸々の学問の完成によって (pāraṇena)、あるいは祭式によって、あるいは布施によって、バラモンの栄誉は増大する。

(10) この世界において、その人に栄誉をつくる名声がある限り[48]、人 (puruṣa) は善行によって作られた無数の世界を獲得する。

(11) (彼はヴェーダを) 学ばしむべし、学ぶべし。祭らしむべし、かつ祭るべし。決して不正に (vṛthā) 受け取るべきでもなく、与えるべきでもない。

---

[40]P.,D.: brahmaiva pratisaṃcaraḥ K. brahmaiva pratisaṃharet

[41]vidyāmayaṃ Cs. vidyāmayaṃ paramātmānam /

[42]brahmāvyakte 「未顕現なるブラフマンの中で」か。

[43]bhūtagrāme niyuktaṃ Ca. bhūtagrāme niyuktaṃ saṃbaddhaṃ, bhūtakartṛkālaniśrayarūpam / Cs. niyuktaṃ pṛṣṭam /

[44]P. pṛcchate D. tac chṛṇu K. sāṃpratam

[45]P. tv eva sarvesāṃ caturnāṃ D.,K.: tv eṣa dharmāṇāṃ sarvesāṃ

[46]「家長期が根本 (mūla) である」ことについては、MBh.XII.184.10, 261.7; Olivelle[1993] p.154; Hara[1997] p.225.16, fn.10 参照。āśrama ではなく、人生の 3 つの目標 (trivarga) という観点からは、行為の停止 (nivṛtti) すなわち mokṣa が根本 (mūla) である、と言われている。(Cf.MBh.XII.123.5)

[47]P. divyais tribhir ṛṇaiḥ D.,K.: eva ṛṇais tribhiḥ

[48]P. asmiml loke kīrtir yaśaskarī D.,K.: asmin kīrtir loke yaśaskarī

(12) 祭主から[49]、あるいは弟子から、あるいは少女から、大きな富がやって来たならば、祭式を行ない、与えるべきであって、決して一人で得てはならない。

(13) この者が家に住むかぎりは、老人、病人、飢えた者たちが、神・聖仙・祖霊・師のために、(この者の与えるものを) 受納する以外に[50]他に (救いの) 道 (tīrtha) はない。

(14) 隠された苦しみをもつ人々[51]、能力に従って生きんと願う人々(bubhūṣatām)、これらの人々には、無理をしてでも (atiśaktyāpi)、食物からでも (?)[52]、品々を (dravyānām) 与えるべし。

(15) 尊敬すべき人々、ふさわしい人々には、与えてならぬものは何もない。ウッチャイヒシュラヴァスという名の (インドラの) 馬でさえも、善き人々にとって獲得されるべきものと知られている[53]。

(16) そして勝利した後、言葉に忠実で偉大な誓約をもつカーヴィヤは[54]、自らの命によって (svaiḥ prāṇair) バラモンの命を[55]救い、天界に到った。(Cf.MBh.I.71)

(17) サンクリティの息子ランティデーヴァは、偉大なヴァシシュタ仙に冷水とお湯を[56]施与して、最高の天界に登った。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.6; Sörensen[Index] pp.593-594)

(18) 思慮深いアートレーヤは、チャンドラとダマなる聖者に対して[57]、種々の富を施与して、無限の世界におもむいたのである、彼の大地の王は。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.3(?)[58])

(19) ウシーナラ王の息子シビは、四肢と自らの愛児をバラモンのために施与して、この世から最高の天界におもむいた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.4, MBh.III.131, 199. Hopkins[Epic Mithology] p.104, Vedic Index I.103, II.p.380;『賢愚経』大正 vol.4, p.351)

(20) カーシの王プラタルダナは、自分の両目をバラモンに施与して、この世でも、あの世でも、比類なき名声を得た。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.5, MBh.XIII.131, Vedic Index II. pp.29-30, 212;『賢愚経』大正 vol.4 pp.390-392、『撰集百縁経』大正 vol.4 p.218)

(21) デーヴァヴリダは、八本の棒でできた[59]最高の神力をもつ神聖な金の傘を施与して、国の民を伴って、天界に昇った。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.7, Sörensen[Index] p.239.)

(22) そしてアトリの子孫、サーンクリティは、属性なきブラフマンを弟子達に教示した後、大きな威光をもって、この上なき世界に到った。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.3; Sörensen[Index] p.619)

(23) 威光あるアンバリーシャは、一億一千万頭の牛をバラモンに贈って、国の民を伴って、天界に昇った[60]。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.8; Sörensen[Index] p.30)

(24) サーヴィトリーは神聖な耳輪を、ジャナメージャヤは身体を、バラモンのために捨て、両者は最高の世界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.9; Sörensen[Index] p.352 Janamejaya2)

---

[49]yājyataḥ Cs. yājyataḥ yāgārhād yajamānāt (Cv adds: yajñadakṣiṇārūpeṇa, śiṣyataḥ gurudakṣiṇārūpeṇa, kanayā saha varadakṣiṇārūpeṇa /)

[50]P.,D.: pratigrahāt K. udāhṛtam

[51]P.,K.: antarhitābhitaptānāṃ D. antarhitāparitaptānāṃ Ca. antarhitā bhūtādayaḥ / Cs. antarhitābhitaptānāṃ vairibhir apahṛtadravyāṇām /

[52]kṛtād api Cn. kṛtāt pakvānnād api / Deussen: was man aus seinen Mitteln zubereitet hat

[53]K. は次の行を挿入して、三行詩としている。

dattvā jagāma prahlādo lokān devair abhiṣṭutān /

[54]P., K.: anunīya tathā kāvyaḥ D. anunīya yathā kāmaṃ Ca.Cs.: kāvyaḥ śukravaṃśaprabhavaḥ / D. には kāvya の語はないので、Ganguli,Deussen は、「言葉に忠実な」(satyasandha) を (固有) 名詞と解している。

[55]brāhmaṇaprāṇān Cv. brāhmanaprāṇān svodaragatakacākhyabṛhaspatiputraprāṇān /

[56]śītoṣṇā Sörensen, Ganguli: lukewarm water Deussen: kaltes und warmes Wasser Ganguli と Sörensen は「ぬるま湯」と解しているが、この意味は辞典類では確認できない。

[57]P. candradamayor arhator D. cendramanohy arhate K. cendradrumayehy arhate Ca. candradamanau viprau /

[58]アートレーヤの行なった行為は全く異なっている。当該箇所は以下のようである。

satkṛtaś ca tathātreyaḥ śiṣyebhyo brahma nirguṇam /
upadiśya tadā rājan gato lokān anuttamān /

[59]P. mṛṣṭaśalākaṃ D.,K.: aṣṭaśalākaṃ Ca. mṛṣṭaśalākaṃ suvarṇarasaliptaśataśalākam / Monier: mṛṣṭaśalāka, prob. w. r. for aṣṭaśalāka

[60]P.,D.: abhyapatad K. abhyagamad Ayodhyā の王 Ambharīṣa の物語は、Rāmāyaṇa I.61-70 に見られるが、この詩節の内容に一致する記述はない。

(25) ヴリシャーダルバ、そしてユヴァーナシュバは[61]、すべての宝石、愛しき妻達、心地よき住居を施与して、彼方の世界に昇った。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.10; Sörensen[Index] pp.753, 786; Hopkins[Epic Mythology]pp.139,182)

(26) バラモンたちのために、ヴィデーハの王ニミは国を、ジャマダグニの子孫は大地を、そして、ガヤは都市のある大地を施与した。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.11,12; Sörensen[Index] pp.303, 518)

(27) パリジャンヤが雨を降らさない時、ヴァシシュタはあらゆる生き物を何度も[62](雨を降らせて) 活かした[63]。造物主が生き物を活かすように。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.13; Sörensen[Index] p.714; Vettam Mani, Purāṇic Encyclopadedia, p.836 (Vasiṣṭha, 3--xix))

(28) カランダマの息子、そして人の王マルッタは[64]、娘をアンギラスに施与して、すぐに天界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.16; Sörensen[Index]dp.471)

(29) パンチャーラの王、英知ある者の中で最もすぐれたブラフマダッタは、すぐれた再生族のために宝物である貝を (nidhiṃ śaṅkhaṃ) 施与し、諸々の世界を獲得した。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.17; Sörensen[Index]dp.154)

(30) ミトラサハ王もまた、偉大なヴァシシュタに愛しきマダヤンティーを施して、彼女と共に天界に赴いた[65]。(Cf.MBh.I.173(Mitrasaha), 113.21-22(Madayantī); MBh.(D.) XIII.137.18; Sörensen[Index] p.480)

(31) 大きな栄光をもつ王仙サハスラジットは、望ましき (自らの) 命をバラモンのために捨て、諸々の無上の世界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.20; Sörensen[Index] p.607)

(32) 大地の主シャタドユムナは、あらゆる好ましき物で満ちた黄金の邸宅をムドガラに与えて、天界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.21; Sörensen[Index] p.197)

(33) ドユティマーンという名の、名前からして (nāmnā) 威光あるシャールヴァの王は、リチーカ仙に国を施与して、諸々の無上の世界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.23; Sörensen[Index] pp.284 (Dyutimat3), 600(Ṛcīka))

(34) 王仙マディラーシュヴァは、ほっそりとした (自分の) 娘をヒラニヤハスタ仙に与え、神々によって讃えられた諸々の世界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.24; Sörensen[Index] pp.324, 451)

(35) 威光ある王仙ローマパーダは、娘のシャーンターをリシヤシュリンガ仙に施与して、あらゆる望ましき物を数多く得た。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.25; Sörensen[Index] pp.448, 601)

(36) 大威光あるプラセーナジット王は、仔牛を伴った十万頭の牛を与えて[66]、この上なき世界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.27; Sörensen[Index] p.560)

(37) これらのまた他の多くの、偉大な、修養を積んだ心をもち、感官を制御した人々が、布施によって、そして苦行によって[67]天界に赴いた。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.28)

(38) 大地がある限り、彼らの名誉は揺るがない (pratiṣṭhitā)。布施・祭式・子孫の創造によって、実にこれらの人々は天界を得たのである。(Cf.MBh.(D.) XIII.137.29ab,30cd)

---

[61]P. vṛṣādarbho yuvānāśvaḥ D. vṛṣādarbhiyuvānāśvaḥ K.vṛṣādarvir yuvānāśvaḥ Sörensen[Index] p.786: PCR(oy) connects Y(uvānāśva) with Vṛṣādarbhi, but probably wrongly; Yuvānaśva の名は、Māndhātā 王の父として、Rāmāyaṇa I.70.25 に挙げられている。

[62]P. cāsakṛt D.,K.: bhūtakṛt

[63]jīvāyāmāsa Ca. jīvāyāmāsa prajāpatir iva vṛṣṭyā / Cp. megho bhūtvā vṛṣṭyā /

[64]P.,K.: marutto nṛpatis D. kṛtātmā marutas この部分、MBh.(D.) XIII.137.16 では 'avikṣitaḥ sutaḥ となっている。

[65]料理に怒った Vasiṣṭha 仙を Madayantī妃が慰める物語は、Rāmāyaṇa VII.65 にあるが、王の名は Saudāsa となっており、内容もこの詩節の記述とは異なっている。

[66]MBh.(D.) XIII.137.27 ではバギーラタ王がコーハラ仙に与えた、となっている。

[67]P.,(D.) XIII.137.28.: tapasā ca ha D.,K.: tapasaiva ca

[227 章] (D.235 章、8613-8644, K.241 章)

ヴィヤーサは言った。

(1) もろもろのヴェーダに述べられた三種の学問を[68]考究すべし。そして (atha)(ヴェーダ) 支分から[69](考究すべし)。リグヴェーダとサーマヴェーダの音と文字によって[70]、そしてヤジュルヴェーダとアタルヴァヴェーダの (音と文字によって)。

(2) ヴェーダの文章に通じたる者、そして大我に通じたる者は、真実を保ち (sattvavanto) 卓越した者として、(生き物の) 生成消滅を見通す[71]。

(3) まことに再生族は、このようにダルマによって生きるべし。諸々の祭式を賢者のごとく行うべし。生き物を害することなく、生計を得ることを願うべし。(Cf.MBh.XII.227.25)

(4) 善き人々より知識を伝えられ、学識あり、聖典に通じ、自らのダルマに従って世間での行為を行い、約束を守り[72]、

(5) 家を継承した再生族たる彼の者は、これら六種の行為に[73]住する。そして常に信仰あつく五種の祭式によって[74]祭るべし。

(6) バラモンたる者は、堅忍をもち、迷乱なく、調御し、ダルマを知り、活力に満ち (ātmavān)、歓喜・恐怖・怒りを滅して[75]、消沈することはない。(=MBh.XII.227.6)

(7) 布施、ヴェーダ学習、祭式、苦行、羞恥、正直、自制、これらによって (彼は) 威光を増大させ[76]、罪を取り去る。(Cf.MBh.XII.232.11ab)

(8) 罪を除き、英知をもち、軽い食事をとり、感官を制御し、愛欲と怒りを支配し、ブラフマンの足跡をたどらんと願うべし。(Cf.MBh.XII.232.12)

(9) 諸々の祭火とバラモンを讃えるべし。そして神々を礼拝すべし。他人を傷つける[77]言葉とアダルマと結びついた殺生を避けるべし。(Cf.MBh.XII.232.8)

(10) これがバラモンの振舞いと昔から[78]規定されている。知識の伝承に従って (jñānāgamena) 行為を行うならば、(バラモンは) 行為において完成する。(Cf.MBh.XII.227.29, 230.1)

(11) 五感を水とし、貪欲を岸とし、怒りを泥とする、恐ろしい、渡るに難しく征服しがたき川を、知恵ある者は渡る。

(12) 愛欲と怒りによってかき立てられ、常に極めて惑乱するような[79]世界、そして自性の流れによって[80]生成する世界は、規範によって定められた (vidhidṛṣṭena) 妨げるものなき大きな力によって絶えず運び去られる。

(13) (川に喩えれば) 時を水とし、年を絶えざる渦とし、月を波とし、季節を流勢とし、半月を (水辺の) 黄色い草と (他の) 草々とする (?)[81]大きな (力によって)、

---

[68]P. trayīvidyām D.,K.: trayīṃ vidyām Cs. trayīvidyāṃ, akārādivarṇatrayātmikāṃ praṇavavidyām /

[69]P.,D.: athāṅgataḥ K. uttamatāṃ gataḥ

[70]-varṇākṣarato Ca. varṇāt svarataḥ, akṣarāt vyañjanāt /

[71]D. と K. は次の１行を挿入し ab 句としている。

tiṣṭhaty eteṣu bhagavān ṣaṭsu karmasu saṃsthitaḥ /

[72]P. loke kurvāṇaḥ satyasaṃgaraḥ D. loke karmasattvasthasaṃcaraḥ K. kurvāṇaḥ so 'py asaṃkaraḥ

[73]ṣaṭsu karmasu Cs. ṣaṭsu karmasu, adhyayanādhyāpanādiṣu /

[74]pañcabhiḥ satataṃ yajñaiḥ 五種の内容について、N. は何も記していない。Deussen は、Die fünf Opfer [an Götter, Ṛshi's Väter, Menshen und Tiere] としている。Ganguli は、*he should worship the deities in the five well-known sacrifices* と訳しているのみ。

[75]P. vītaharṣabhayakrodho D.,K.: vītaharṣamadakrodho

[76]P.,D.: vardhayate K. vivardhate MBh.XII.232.11ab では P. も vivardhate と読んでいる。

[77]P. ruṣatīṃ D. ruśtīṃ K. uśatīṃ

[78]P.,K.: pūrvatarā D. pūrvagatā Ca. pūrvatarā atimukhyā /

[79]P. kāmamanyūddhataṃ yat syāt nityam atyantamohitam D.,K.: kālam abhyudyataṃ paśyen nityam atyantamohanam

[80]svabhāvasrotasā Ca. svabhāvasrotasā svīyavā(?)gbhavīyavāsanayā srotaseva /

[81]pakṣolapatṛṇena Ca. upalaṃ haritaṃ, tṛṇaṃ sāmānyam / Deussen: Buschwerk und Gräser

(14) 目の開閉の瞬間を泡とし、昼夜を速さとし、愛欲を恐ろしい鰐とし、ヴェーダと祭式を舟とする (大きな力によって)、

(15) ダルマを生き物にとっての島とし、財産と欲望を轟音とし[82]、天則と階梯を岸とし[83]、障害という木片を運ぶ[84](大きな力によって)、

(16) 世界期を海の激流の中央とし、そして、ブラフマンから生じた[85](大きな力によって)、創造者は創造された生き物をヤマの住居に引き込むのである。

(17) かくして、確固とした賢者たちは、(この川を) 英知からなる舟によって渡る。舟をもたぬ思慮なき者たちには、一体何ができようか。

(18) 英知ある者は渡ることができるが、他の者は渡らない、ということは的を得ている (upapannam)。なぜならば、英知ある者は、遠くから徳と欠点とをあらゆる点において観察するからである。

(19) 疑いをもち[86]、欲望をもち、心散漫にして思慮浅き、英知なき者は渡らない。なぜならば、座したる者は進まないからである。

(20) 舟なく (流れに) 運ばれて行く者は[87]、大きな罪に近づく[88]。愛欲の鰐に捕らえられた者にとっては、知識も舟ではない。

(21) それ故、浮上する (unmajjana) ために賢者は努めるべし。彼がバラモンとなる時、彼は (水面に) 浮上するであろう。(Cf.Brh. U. 4.4.23)

(22) 三種の清浄さをもつ家系に生まれ[89]、三種の疑問をもち、三種の行為を行う者は[90]、その故に、浮上し、英知によって正しく (川を) 渡るであろう[91]。

(23) 清められ、調御し、抑制し、自己を完成した英知ある者は、すぐに (anantarā) この世でもあの世でも成就する (siddhi)。

(24) 家長は (gṛhavān)、これらの人々の中で、怒らず妬みなく生活すべし[92]。(その者は) 獣肉を食べる者として (vighasāśī)、常に五種の祭式を祭るべし。

(25) 善き人々の振舞いに従って生きるべし。賢者のごとくもろもろの祭式を[93]行うべし。ダルマを[94]害することなく、非難されざる生計を得ることを願うべし。(Cf.MBh.XII.227.3)

---

[82]P.,K.: arthakāmaraveṇa D. arthakāmajalena Ca. jalena, atiśītatvād dustareṇa /

[83]P. ṛtasopānatīreṇa D.,K.: ṛtavāṅmokṣatīreṇa

[84]vihiṃsātaruvāhinā 川の流れに浮かぶ taru(「木片」) は、生き物に危害を加えるということか。しかし、木片は、川で流されている生き物がすがる物、と考えることもでき、その場合には ahiṃsā の方が理解しやすい。Ganguli はこの語を benevolence と解している (中村 [1998] はこれに従っている) が、可能か。 Deussen: der die Schädigungen als Baumstämme mit sich führt Ganguli: benevolence for the trees that float along it. さらに、脚注で、*Vihinsa-taruvahina* is 'having benevolence for the trees that float on its water.' と述べている。

[85]brahmaprāyabhavena Cn.,Cs.: brahmaprāyabhavena brahmakāryabhūtena / 「ブラフマンから生成消滅する」という意味か。Deussen: dessen Vergang und Entshehen aus Brahman ist.

[86]P. saṃśayātmā sa D. saṃśayaṃ sa tu K. saṃśayāt tu sa

[87]P. uhyamāno D.,K.: muhyamāno

[88]P. adhigacchati D. niyacchati K. na gacchati

[89]P.,K.: tryavadāte kule jātas D. avadāteṣu saṃjātas Ca. trīṇy avadātāni vidyāyonikarmarūpāṇi yasya / Cp. brāhmaṇas trauvamaukhair amale /

[90]trisaṃdehas Ca. trisaṃdehaḥ kvāhaṃ, kathaṃ duḥkhī, kena baddhaḥ; iti mumukṣoḥ saṃdehatrayam / Cn. triṣu adhyāpanayājanapratigraheṣu saṃdehavān, tatrāpravṛttaḥ / trikarmakṛt svādhyāyayajanadānakṛt / Cp. nityanaimittikakāmyeṣu saṃdehaḥ / trisaṃdeha について、Ca. は「解脱に向かわせる三種の疑問」、Cn. は「学習させること、祭式を行なわせること、ものを受け取ることの三種を行なわないこと」と解釈しているが、はっきりしない。

[91]P. nistaret prajñayā yathā D.,K.: prajñayā nistared yathā

[92]P. vartate D.,K. varteta P. は、現在形で optative の意味で用いている、と理解すべきか。(Cf. Delbrück, Altindische Syntax, p.279) Meenakshi はこのような用例に言及していない。(Cf.K.Meenakshi, Epic Syntax, New Delhi, 1983)

[93]P. kriyāḥ D..K.: kriyāṃ

[94]P. dharmasya D.,K.: lokasya

(26) 天啓聖典と (世俗的) 知識 (vijñāna) と真理を知り、振舞いに通じた賢者は[95]、自らのダルマに従って祭式を行ない、行為に関して (?karmaṇā) 種姓の混合を行なわない。

(27) 祭式を行い、信仰篤く、布施を行い[96]、妬みなく英知あり[97]、ダルマとアダルマとの相違を知る者は、あらゆる越えがたきものを越える。

(28) バラモンたる者は、堅忍をもち、迷乱なく、調御し、ダルマを知り、活力に満ち、歓喜・恐怖・怒りを滅して[98]、消沈することはない。(Cf.MBh.XII.227.6)

(29) これがバラモンの振舞いと昔から[99]規定されている。(この) 知識を得て[100]行為を行うならば、あらゆる点で成就する[101]。(Cf.MBh.XII.227.10, 230.1)

(30) 賢者ならざる者はダルマを願いつつもアダルマを行う[102]。あるいは、ダルマがアダルマのように見えるのを[103]愁えながら (śocann iva)(ダルマを) 行う。

(31) 「私はダルマを行う」といってアダルマを行い、そして、アダルマを望んでダルマを行う。(このような) 愚かな[104]者は (dehin)、二つの行為を知ることなく、生まれては[105]死ぬのである。

[228 章][106](D.236 章,、8645-8687, K.242 章)

ヴィヤーサは言った。

(1) さて、もしこのことを正しいと思い、そして心から憎むならば[107]、(流れにおいて) 浮かびつつまた沈みつつも、 知識を得、舟を得るであろう (Cf.Hopkins[Great Epic] p.189)。

(2) 英知によって作られた舟によって、堅固な人々は[108]知恵なき者を渡らせる。知恵なき者は、他の者にせよ自分にせよ、決して渡らせることはない。

(3) 欠点を断ち、ヨーガに集中する[109]聖者は十二を繋ぎとめるべし[110]。行為を安楽とする十の対象を、獲得と喪失を恐れることなく (繋ぎとめるべし (?))[111]。

---

[95]P.,D.: śiṣṭācāro vicakṣaṇaḥ K. śiṣṭācāravicakṣaṇaḥ

[96]P. ca dātā D.,K.: hi dāntaḥ

[97]P.,K.: prājño K. prāyo

[98]P. vītaharṣabhayakrodho D.,K.: vītaharṣamadakrodho

[99]P. pūrvatarā vṛttir D.,K.: purātanī vṛttir Ca. pūrvatarā atimukhyā /

[100]P. jñānavittvena D. jñānavattvena K. jñānavṛddhyaiva

[101]sidhyati Ca. utpannatattvajñānena kiṃ heyaṃ karma / nety āha /

[102]P. karotīhāvicakṣaṇaḥ D.,K.: karoti hy avicakṣaṇaḥ hi は sandhi によって語がつながるのを防いでいるので、D.,K. の読みは、誤読を防ぐために P. の iha を変更したと見なすことができよう。

[103]P. dharmaṃ cādarmasaṃkāśaṃ D.,K.: dharmaṃ vā darmasaṃkāśaṃ

[104]P.,K.: bālaḥ D. abalaḥ

[105]P.,D.: sa jāyate K. saṃjāyate

[106]vv.4cd—19,27-38 については Edgerton[1965] p.264-266 に英訳がある。

[107]P. druhyeta manasā tathā D.,K.: uhyeta srotasā yathā

[108]P.,K.: prajñayā nirmitair dhīrās D. prajñayā niścitā dhīrās

[109]P. yogān yukto D. yogān mukto K. yogayukto

[110]yuñjīta dvādaśa Ca.,Cp.: dvādaśa yogān manoniyamanaprakārān (Cp. daśendriyamanobuddhiniyamalakṣaṇān) / Cn. dvādaśa deśādīn / Cs. śarīrasya navadvāre ākāśaṃ, tvakpāṇyoḥ vāyuṃ, jaṭhrāgnau cakṣuṣi agniṃ, rudhirādidrave jalaṃ, vāhyādiṣu bhūmiṃ manasi candraṃ, śrotre diśaḥ, pādayoḥ upendraṃ, vāci agnim, gude pitaraṃ, meṇḍhre prajāpatiṃ dhyāyet — ete dvādaśa yogāḥ / tathā ca manuḥ (Manu 12.120-121) / Cv. dvādaśa — yajanādiṣaṭkarmāṇi kāmādiṣaḍvarganigrahākhyaṣaṭūkarmāṇi, snānaśaucatapaḥsatyadayātitikṣākhyāni vā ṣaṭkarmāṇi / Deussen はŚvet U.2.8 の参照を指示して、Leib, Manas, Sinne を 12 としている。Hopkins は D. に従って、deśa, karma, anurāga, artha, upāya, apāya, niścita, cakṣu,ahāra, saṃhāra, manas, darśana を 12 としている。(Cf.Hopkins[1901] p.349) この読みは P. とは全く異なっている。P.3c の daśa 以下 4ab までが読みにくい理由として、D. の、内容・語形とも脈絡のはっきりしない 12 項目 (Hopkins: in a free version of the text's free syntax) を、deśa に似た daśa という数詞を用いて再構成しようとしたという可能性が考えられる。Hopkins はそれぞれの項目に種々の語を補いつつ理解を試みている。

[111]P. daśa karmasukhān arthān upāyāpāyanirbhayaḥ D. deśakarmānurāgārthānupāyāpāyaniścayaḥ K. daśakarmasukhān arthān upāyāpāyaniṣkriyaḥ Cs. upayāpāyaniṣkriyaḥ, ādānatyāgayor aviśeṣaḥ /

(4) 眼の振舞いを知る (?) 賢者は[112]、心 (manas) によって、そして、観察によって (?darśanena)(繋ぎとめるべし?)。最高の知識を願う者は、意識 (buddhi) によって言葉と心を制御すべし。自己の寂静を願う者は、自己の知識によって自己を[113]制御すべし。

(5) これらを観察する者ならば、邪悪な者であっても、ヴェーダをすべて知る者も、あるいは、讃歌を知らず、低誦せぬ者も、

(6) ダルマにかなった信仰者も、最も悪しき罪を為す者も、あるいは又人中の虎、あるいは臆病者であっても[114]、

(7) 渡るのが極めて困難な老死の海を渡るのである。このように、このヨーガによって、専心して唯一のものに[115]集中するならば、(音声のブラフマンを) 知らんと欲していても、音声のブラフマンを超えるのである (śabdabrahmātivartate)。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.90, fn.2)

(8) ダルマを座席とし[116]、羞恥を手すりとし、獲得・喪失を轅とし[117]、吸気を車軸とし、呼気を軛とし[118]、英知と寿命と霊魂 (jīva) を手綱とし、

(9) 意識を御車席とし[119]、姿善く、善行の受納 (ācāra-graha) という輪ふちをもち、視覚と触感とを肩押材とし、嗅覚と聴覚とを馬 (引く動物) とし、

(10) 英知を轂とし、あらゆる聖典 (tantra) を鞭とし (Cf.Hopkins[Great Epic] p.117, fn.2)、知識を御車とし、知田者に支配され[120]、堅固で、信仰と自制を待者とし,

(11) 棄却の道を進み[121]、めでたき、清浄に向かい、禅定を領域とする、霊魂 (jīva) によって繋がれた神聖な四輪車は、ブラフマンの世界において輝く。

(12) さて、急いでこのような四輪車を繋ぐのを望み、不滅のもの (akṣaraṃ) に達することを意図する者に対して、その方法を簡潔に語るであろう。(Cf.Hopkins[1901] p.349, fn.1)

(13) 言葉を制御する者は、(次の詩節の) 七種すべての保持 (dhāraṇā) に達する。そして、他に背後や側面からの[122]同数の[123](補助的な) 保持 (pradhāraṇā) に (達する)[124]。(Cf.Hopkins[1901] p.351)

(14) 順番に、地の支配、風の支配、虚空の、そして水の[125]、火の、自我意識の、理性の支配に (達する)。

(15) そして、未顕現のもの (avyakta) の支配にも順に到達する。これらの (順次獲得した) 力[126]を持つものは (yasya)、またヨーガによって集中する[127]。

(16) さて、ヨーガに集中し、自己において成就を見る者は[128]、微細さから抽出されて (?)[129]次のような姿を見せるであろう[130]。

---

[112]P. cakṣurācāravit prājño D. cakṣurāhārasaṃhair K. cakṣurācārasaṃgrāharair

[113]ātmānam Cn.,Cs.,Cv.: ātmānaṃ buddhim /

[114]P. vā klaibyadhāritā D. vā kleśadhāritaḥ K. vaiklavyadhāraṇaḥ D. の kleśa の用例については Hopkins[1901] p.339 参照。

[115]P. 'py ekam antataḥ D.,K.: hy evam antataḥ

[116]dharmopastho Ca. upastho rathamadhyam /

[117]upāyāpāyakūvaraḥ Cn. kūvarau dhūrdaṇḍau /

[118]apānākṣaḥ Ca. akṣaś cakradhārakaṃ kāṣṭham /

[119]cetanābandhuraś Ca. bandhuraṃ sārathisthānam /

[120]kṣetrajñādhiṣṭhito Cf.Johnston[1937] p.44

[121]P. tyāgavartmānugaḥ D. tyāgasūkṣmānugaḥ K. tyāgaraśmyanugaḥ

[122]pṛṣṭhataḥ pārśvataś Ca. pṛṣṭhataḥ pārśvata iti / etāḥ sapta pradhānabhūtāḥ, śeṣās tu pṛṣṭhata iva pārśvata iva gauṇyo manoniyamanamātraphalāḥ /

[123]P. cānyā yāvatyas D.,K.: cānyās tāvatyas

[124]pradhāraṇāḥ Ca. mokṣasyāhatya sādhikāḥ sapteti bhāvaḥ / ata eva śeṣāḥ pradhāraṇaḥ /

[125]payas Cn. payaḥ payasaḥ jalasya / ṣaṣṭhyarthe prathamā /

[126]vikramāḥ Ca. vikramāḥ udyamaviśeṣāḥ / Cn. anubhavakramāḥ / Edgerton[1965] powers

[127]P.,K.: tathā yuṅkte sa yogataḥ D. tathā yukteṣu yogataḥ

[128]P. athāsya yogayuktasya D. tathā yogasya yuktasya K. tathāsya yogayuktasya

[129]P. nirmathyamānaḥ sūkṣmatvād D.,K.: nirmucyamānaḥ sūkṣmatvād

[130]P. darśayet D.,K.: paśyataḥ

(17) あたかも冬、空に広がった微細な霧のように、体から解放された者の最初の姿は存在する。

(18) そして (そのような) 霧が終ると、第二の姿が見られる。(人が) 虚空に水の形を見るのと同様に、自己において[131](水の形を) 見る。

(19) さらに水が去ると、火の形が[132]現われる。それ (水) が消えた時、彼には (? cāsya ヨ–ギンか) 黄色い布のように[133]思われる、羊毛の形に似たそ (の火) の姿が現われる[134]。

(20) そして、火 (ajaḥ) が[135]白い状態になった後[136]、微細な風が (生じる?)。このバラモンの意識には、白くなく[137]形のない (avyakta) 微細さが (生じる?)[138]。

(21) これらが生じた者に生じるもろもろの果報について私の言うことを聞くべし。(これらが) 生じた者にとっては、地上のものを自在にする[139]創造 (力) がふさわしいと規定されている[140]。

(22) あたかも造物主のように、彼は動かずに、体から、あるいは指と親指のみによって、あるいは、手足によって、生き物を創造する。

(23) 風の属性 (となった者) は一人で地を震動させる、と伝えられている[141]。虚空となった者は、虚空の中に、同じ色のゆえに、消える[142]。

(24) (地水としての彼は) 色によって知覚される[143]。そしてまた、意のままに諸々の器を呑み干す[144]。そして火として (の彼は)、その姿は見られることはなく、消えてしまう。

(25) 自我意識が征服された時、これら五種 (の元素) は、支配されるであろう。そして、統覚 (buddhi) が征服されたとき、六種 (の支配) がアートマンに生じる。

(26) 欠点なき完全な[145]輝きが彼に到る。そして、顕現したもの (vyaktam) は未顕現のアートマンに達する。

(27) 世間がそこから生じ、顕現と名づけられるもの、すなわち未顕現についての説明を[146]私から詳しく聞くべし。同様に、顕現に関する考察を、まず[147]私から聞くべし。

(28) ヨーガとサーンキヤにおいて、両者に等しい二十五原理について、そして (両者の) 相違について、私の言うことを聞くべし。

(29) 誕生し、成長し、老い、死ぬという四つの特徴と結びついたものが、顕現したものと言われている。(Cf.Buddhacarita 12.22, Hopkins[1901-2] p.388)

---

[131]P.,K.: tatraivātmani D. tathaivātmani tatraiva がはっきりしない。tathā ならば、iva と対応して、jalarūpa と取ることが可能であろう。

[132]vahnirūpaṃ Cs. vahnirūpaṃ piṅgalo varṇaḥ /

[133]P. tasminn uparate cāsya pītavastravad iṣyate D. tasminn uparate 'jo 'sya pītaśastraḥ prakāśate K. tasminn uparate cāsya vāyavyaṃ sūkṣmam avyayam Cn. pītaśastravat — pītāni gilitāni śastravad vicchedakatvād vṛkṣāgāra-parvatādīni śastrāṇi yena tadvat /

[134]P. ūrṇārūpasavarṇaṃ ca tasya rūpaṃ prakāśate D. ūrṇārūpasavarṇasya tasya rūpaṃ prakāśate K. rūpaṃ prakāśate tasya pītavastravad avyayam

[135]P. sūkṣmam apy ajaḥ D. sūkṣmam apy uta K. so 'haṃkāre prakāśate K. はこの詩節の前に次の２行を挿入している。

tasminn uparate rūpam ākāśasaya prakāśate /
tasminn uparate cāsya buddhirūpaṃ prakāśate /

[136]śvetāṃ gatiṃ gatvā Ca. ́vetām upādhiśūnyāṃ rūpamātrapratinirmalām iti vā /

[137]P.,D.: aśuklaṃ K. suśuklaṃ

[138]P. saukṣmyam avyaktaṃ brahmaṇo 'sya vai D.,K.: saukṣmyam apy uktaṃ brāhmaṇasya vai

[139]P. pārthivaiśvarye D.,K.: pārthivaiśvaryaiḥ

[140]P.,K.: sṛṣṭir iṣṭā vidhīyate D. sṛṣṭir atra vidhīyate

[141]P. smṛtaḥ D.,K.: śrutiḥ

[142]P. praṇaśyate D.,K.: prakāśate

[143]P. varṇato gṛhyate cāpi D. varṇato guhyate cāpi

[144]P.,D.: cāpi kāmāt pibati cāśayān K. cāpsu nāpaḥ pibati cāśayā Ca. samudrādīn āśrāyān /

[145]P. kṛtsnā Cs. kṛtsnā sarvavyāpiṇī /

[146]P. vyākhyāṃ D.,K.: vidyāṃ

[147]P. vyaktamayīṃ caiva saṃkhyāṃ pūrvaṃ D. vyaktamayaṃ caiva sāṃkhye pūrvaṃ K. vyaktamayaṃ caiva sāṃkhyāpūrvaṃ

(30) それとは逆のものが未顕現と言われ、アートマンは二種であると[148]、ヴェーダにおいても教義書においても[149]言われている。

(31) 四つの特徴より生じたものは別に[150]四つの集合と呼ばれる[151]。顕現したものは、未顕現より生じ、他方 (未顕現) は意識をもつ[152]。サットヴァと知田者というように[153]この両者は示されることもある[154]。

(32) ヴェーダにおける二種のアートマンは、諸々の外的対象に引き付けられている[155]。外的対象から退くことが、サーンキヤの成就の特徴である。(Cf.Hopkins[1901] p.346)

(33) (成就した者は)「私のもの」という意識がなく、自我意識なく、対立なく、疑いを断ち切り、怒らず、憎まず、偽って称賛を語らない。(Cf.BhG.2.45; Hopkins[Great Epic] p.114,fn.1; Edgerton[1965] p.266, fn.1.)

(34) (彼は) 怒鳴られ、殴られても、慈悲によって、悪しきことを考えない。言葉の杖・行為・心という[156]三種 (の攻撃) を行なわない。(Cf.Haas[1922] p.42, No.803)

(35) (彼は) あらゆる生き物に対して等しく、ブラフマンに近づく。彼は何も望まず、望みがないこともないが、生命維持のみに留めている (yātrāmātravyavasthitaḥ)。

(36) 望みを離れ、苦しみなく、抑制し、活動的でなく、拒否するのでもない[157]。この者の感官は多くの先端をもたず、願望は限度を越えて放たれない[158]。彼はあらゆる生き物に危害を加えない。このようにしてサーンキヤに従う者は解脱する[159]。

(37) さて、どうすればヨーガによって解放されるか、私の言うことを聞くべし。ヨーガの自在力を超え、(世間を?) 超えた者は[160]、解脱するであろう[161]。

(38) 以上のように心に生じた悟りについて[162]汝に語られた。この点に疑いはない。かくして対立なく存在し、ブラフマンに至る。

(2000年9月25日 受理)

---

[148]dvāv ātmānau N. dvau jīveśvarau /

[149]vedeṣu siddhānteṣu N. vedeṣu karmakāṇḍeṣu yajamāno yaṣṭavyaś ca tena yaṣṭavyadevatā yāś cetantvam anicchanto mīmāṃsakāḥ parās tāḥ / siddhānteṣu vedānteṣu siddhānta については Hopkins[Great Epic] p.117,fn.2 参照。

[150]P. tv anyaṃ D.,K.: tv ādyaṃ

[151]caturvargaṃ pracakṣate Deussen: Götter, Menschen, Tiere, Pflanzen

[152]P. buddham athetarat D. buddham acetanam K. buddhir athetarat

[153]sattvaṃ kṣetrajña ity etad N. sattvaṃ buddhiḥ kṣetrajñaś cid ātmā / Peter Bisschop は、MBh.XII.187 と 239-241 章を Frauwallner 説の再検討という形で詳論し、ここでの N. の解釈と同様な解釈を提示している。(Cf. Peter Bisschop and Hans Bakker, *Mokṣadharma 187 and 239-241 reconsidered*, Asiatische Studien, LIII-3, 1999, pp.459-472)

[154]P.,D.: dvayam apy anudarśitam K. dvayam avyaktadarśanam

[155]P. vedeṣu viṣayeṣu ca rajyataḥ D.,K.: vedeṣu viṣayeṣv anurajyataḥ

[156]P.,K.: vāgdaṇḍakarmamanasāṃ D. vāgdaṇḍakarmamanasā N. vāgdaṇḍaḥ pāruṣyaṃ /

[157]na nirākṛtiḥ N. nirākṛtiḥ tucchaveṣaḥ / Deussen: und doch nicht ohne Kunst Edgerton: yet not neglecting religious duty

[158]P. nātikṣiptamanorathaḥ D.,K.: nāvikṣiptamanorathaḥ

[159]D.,K. は P.36cd と ef の間に次の3行を挿入している

sarvabhūtasadṃ maitraḥ samaloṣṭāśmakāṃcanaḥ /D.38ab, K.39ab/

tulyapriyāpriyo dhīras tulyanindātmasaṃstutiḥ /D.38cd, K.39cd/

aspṛhaḥ sarvakāmebhyo brahmacaryadṛḍhavrataḥ /D.39ab, K.40ab/

[160]P.,K.: yogaiśvaryam atikrānto yo 'tikrāmati D. yogaiśvaryam atikrānto yo niṣkrāmati atikrāmati あるいは niṣkrāmati の目的語が明確でない。

[161]サーンキヤとヨーガの相違については、Hopkins[Great Epic] pp.113-114 参照。「ヨーガの自在力 (yoga-aiśvarya)」は MBh.XII.289.24-29 に詳述されている。(Cf.Edgerton[1965] p.266,fn.2)

[162]bhāvajā buddhiḥ Deussen: die aus dem richtigen Verhalten entspringende Erkenntis Edgerton: this enlightenment born in the heart Monier: bhāvaja—'heart-born,' love or the god of love